

# 精選現代文B 教材の内容

## 第一部

### 一 随想

#### ● 最初のペンギン(茂木健二郎) 思考論

「生物は皆不確実な世界の中で生きている」。人はその不確実な状況にどう立ち向かっているのか、直観と感情をキーワードに解く。

#### ● わかりやすいはわかりにくい?(鷺田清一) 思考論

理解できない問題に対して、単純な正解を求めるのではなく、考え抜くことで「正確に対処することの大切さ」を説く。

### 二 小説(一)

#### ● 山月記(中島敦)

若くして才能を発揮した李徴は、詩人として名をなすべく詩作にふけた。しかしその後、彼を待っていたのは数奇な運命だった。

#### ● ランドセル(角田光代)

子どもの時には「全財産」が入ったのに今は「泊旅行に必要なものすら入らない」ランドセルが、「私」の危機を救ってくれた。

### 三 評論(一)

#### ● ミロのヴィーナス(清岡卓行) 芸術論

「ミロのヴィーナス」の失われた両腕に美を見だし、人間存在のありようを洞察した論考。

#### ● 未来世代への責任(若井克人) 環境論

「京都議定書」問題で露呈した環境問題の本質を、経済学者が資本主義の原理から説き起こす。

#### ● 恐怖とは何か(岸田秀) 心理論

恐怖とは何か、心理学者が人間の自我の構造から、そのメカニズムを明らかにする。

### 四 詩歌

#### ● 二十億年の孤独(谷川俊太郎)

地球と火星の関係から宇宙の果てまで広がる「みんなの孤独」ともとめ合う心。詩人の鮮烈なデビュー作。

#### ● パンの話(吉原幸子)

「パン」と「バラ」とおして、生と芸術の境界線を生きた「わたし」の決意を表した作品。

#### ● 永訣の朝(宮沢賢治)

「いもうと」が死ぬ前に「わたくし」に頼んだことと、それが意味することとは。若くして死んだ妹に送る挽歌。

#### ● 木に花咲き——短歌十五首

窪田空穂から穂村弘まで近現代の歌人十五人の秀歌を、「愛恋」「自然」「いのち」「戦争」「学園」の五つのジャンルに沿って選んだアンソロジー。

### 五 評論(二)

#### ● メディアと歴史(若林幹夫) メディア論

人間はメディアという「他者」を手に入れることで何を捨て、代わりに何を生み出したのかを追う。

#### ● 木の葉と光(日高敏隆) 環境論

個々の動物が独自に作り出す世界「環世界」という概念で、自然環境を捉え直す。

#### ● コンクリートの時代(隈研吾) 文化論

コンクリートという建築素材とおして、二十世紀の人々が見た夢と希望、そしてその結末を鋭く論じる。

### 六 小説(二)

#### ● 蠅(横光利一)

真夏の馬車の停車場に集まる人々の人間模様を二匹の蠅の姿と対比させて描く。近代小説の新境地を拓いた作品。

#### ● レキシントンの幽霊(村上春樹)

「ぼく」がアメリカのレキシントンの古い屋敷で「幽霊」に出会った体験を語る。現代日本を代表する作家の小編。

### 七 評論(三)

#### ● 戦争の不可能性(西谷修) グローバリズム論

二十世紀の戦争のもたらした戦争の「世界化」の内実を解き明かし、これから人類が歩むべき道を示唆する。

#### ● [The] Juu[The] Juu(丸山真男) 近代化論

「である」「価値と」「する」「価値」という概念から、近代社会を問い直す、戦後の思想界をリードした政治学者による論考。

### 八 小説(三)

#### ● 11/22(夏目漱石)

人と人との間に横たわる闇と孤独、エゴイズムを鋭く見つけた近代の代表的小説。

### 批評のまなざし

#### ● 木を伐る人／植える人(赤坂憲雄) 環境論

木を「伐ること」と「植えること」は人にとって対立ではなく共存する事柄だったことを、実証的な研究の成果から明らかにする。

#### ● 「選べる社会」の難しさ(松田美佐) メディア論

現代において私たちは、何かを選択する際に自分の経験や嗜好にとらわれがちであり、それを自覚することの必要性を論じる。

#### ● 空白の意味(原研哉) 芸術論

日本人が空白を、何もないのでなく何かを隠されている、と捉えて表現し活用してきたことを絵画を例に述べる。

## 第二部

### 一 評論(一)

- 「ブーボー」と「マンマ」の記号論(池上嘉彦) **言語論**  
言語という記号を用いて世界を意味づけることは、未知のものを提えて自分たちの世界に取り込む営みであること  
を説く。

- サウルとラレル(長嶋善郎) **言語論**

似た意味をもつ言葉の違いについて、多種多様な文例をあげることで、感覚ではなく具体的に説明する。

### 二 小説(一)

- 靴の話(大岡昇平)

第二次大戦下の激戦地で戦死者が残した新品の靴を取り合う兵士たち。「私」が見た戦争の真実とは。

- 靴(安部公房)

持ち主の行き先を決めてしまふ靴をとおして人間の自由について考えさせる、不思議なタッチの現代小説。

### 三 評論(二)

- 身体への疎外(黒崎政男) **身体論**

電脳化した現代社会において疎外されてきた「身体」が、逆に「私」をのけものにし始める。バイオメトリックス認証から現代の「私」を考える。

- 判断停止の快感(大西赤人) **社会学**

「きれい」「清潔」といった言葉がもつ判断停止の誘惑と、そこに潜む観念性と幻想、一元的な思考への可能性を指摘する。

- 病と科学(柳澤桂子) **生命論**

病気の治療において科学に全てをゆだね、人が病を受けとめる力を失っていくことの危うさを論じる。

### 四 詩歌

- 樹下の二人(高村光太郎)

みちのくに広がる大自然の前に、恋人とそのふるさとを詠う恋愛詩。

- 死んだ男(鮎川信夫)

戦死した友人を悼み、若き日の交流と自らの詩に対する決意を表す追悼詩。

- 小諸なる古城のほとり(島崎藤村)

春まだ浅い新修を舞台に、孤独な「遊子」の憂愁を詠った文語定型詩。

- 渡り鳥——俳句十五句

高浜虚子から田中裕明まで近現代の俳人十五人の秀句を、「鳥」「虫」「旅」「戦争」「野菜」の五つの題に沿って選んだアンソロジー。

### 五 評論(三)

- 「私」消え、止まらぬ連鎖(高村憲) **社会学**

現代の消費のサイクルの中で、「欲望」が「私」から離れ、外部化していくメカニズムを明らかにする。

- 南の貧困／北の貧困(見田宗介) **グローバリズム論**

先進資本主義国による貨幣の尺度で計られた「貧困」と、測定できない「幸福」とは、別の次元で捉えるべきだと主張する。

- 虚ろなまなざし(岡真理) **グローバリズム論**

難民の子どもに自己同一化することで自分たちの加害者を隠蔽するというヒューマニズムの陥穽を突く。

### 六 小説(二)

- 舞姫(森鷗外)

ベルリンの街を舞台に、若きエリート太田豊太郎と踊り子エリスの出会いと別れが描かれる。日本近代文学を代表する作品の一つ。

- 飛行機で眠るのは難しい(小川洋子)

飛行機で偶然隣り合わせた男が語る不思議な老女の死の物語が、「わたし」を眠りへと導く。

### 七 評論(四)

- 日本文化の雑種性(加藤周) **文化論**

今日の日本文化がさまざまな部分で分ちがちがたく西洋文化と結びついていることを、具体例に則して述べる。

- 無常といふこと(小林秀雄) **文化論**

この世の「無常」と「常なるもの」について論じる、近代を代表する評論家の論考。

### 批評のまなざし

- ネット上の発言の劣化について(内田樹) **メディア論**

マスメディアが情報の質を選別してくれない現代において、情報の価値を検証し認識することの必要性和重要性を述べる。

- カタカナ語は享受すべきか(山田良角田史幸) **言語論**

カタカナ語の増加を日本語の乱れとだけ捉えず、多様な言葉の存在を知ることが他者理解につながるという視点を示す。

- 科学の現在を問う(村上陽一郎) **科学論**

脳死判定による臓器移植を認める法律に対して、筆者が感じた違和の理由と、その根元にあるものを考察する。